

学習指導要領に

情報モラルの育成が明確に位置付けられました。

すべての学校種において、各教科等の指導を通して、ICTを活用する技能と情報モラルについて、系統的に身に付けさせることが明示されました。

たとえば社会科では、電子メールを使って遠隔地への調査をする場合などに、メールの書き方や発信する情報に対する責任などについて指導することが考えられます。

また「著作権」にかかわる道徳の時間の指導では、法律の内容や仕組みについての学習をするのではなく、「自他の作品を大切にする」気持ちを育てたり、権利や義務について考えさせたりするなど、発達段階に応じて道徳的な価値について考えることが大切です。

各学校においては、体系的な取組の一層の推進をお願いします。

情報モラルとは・・・
『情報社会で適正に活動するための基となる考え方や態度』とされています。（総則より抜粋）

情報モラルの5つの領域

日常モラルの側面 心を磨く

情報社会の倫理

法の理解と遵守

公共的な
ネットワーク社会
の構築

安全への知恵

情報セキュリティ

安全の側面 知恵を磨く

情報モラルに含まれる内容

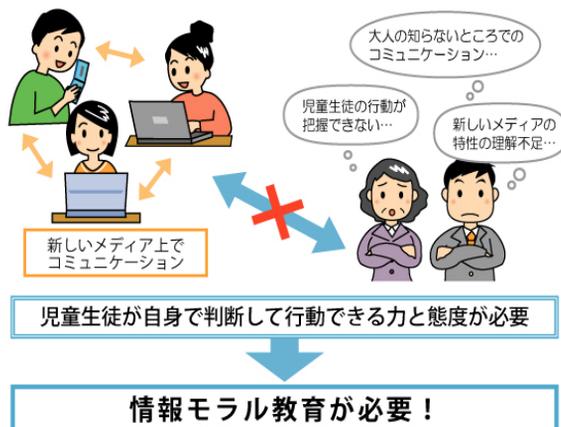
◎「心を磨く領域」

情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てること

◎「知恵を磨く領域」

情報社会で安全に生活するための危険回避の方法の理解やセキュリティの知識・技術、健康への意識

「心」と「知恵」は表裏一体の関係にあることから、日常的に一体的に、そして繰り返し指導する必要があります。



詳しい内容や具体的な指導事例は以下のサイトで

「やってみよう情報モラル教育」

<http://kayoo.info/moral-guidebook-2007/>

「情報モラル」指導実践キックオフガイド

<http://kayoo.info/moral-guidebook-2007/kickoff/index.html>

「教育の情報化に関する手引き」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm

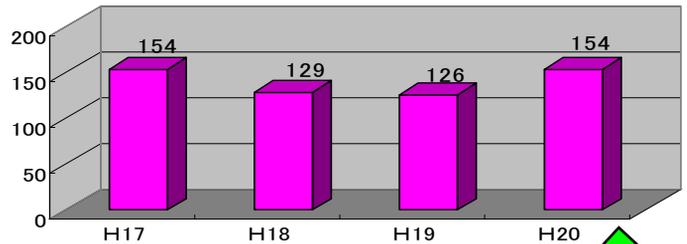
不登校の現状と対策

不登校未然防止中学校区プロジェクト

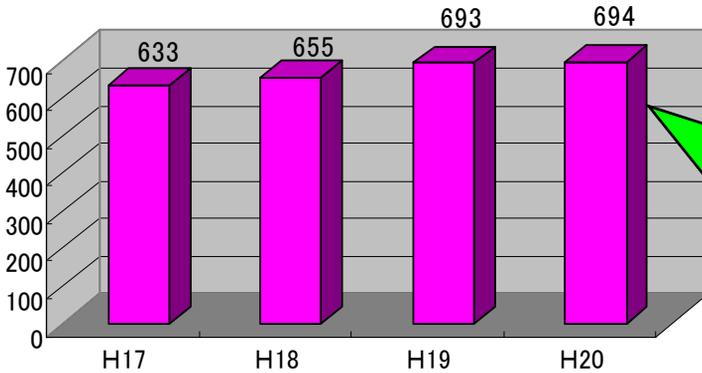
<不登校児童生徒の現状>

本年8月に公表された学校基本調査では、平成20年度中に不登校を理由に30日以上上の欠席をした児童生徒数は、右のグラフのようになっています。

小学校(人数)



中学校(人数)



小学校は、28人増加しました。中学年の増加が見られました。

中学校は、1名の増加にとどまっています。中学校1年生は、前年度より56人の減少でした。これまで、各校でご尽力いただいた小中連携の成果と受けとめています。

月別欠席状況一覧活用例

学校支援課や区担当指導主事による、月別欠席状況一覧に基づく支援や助言を、9月までに、延べ742人について実施しました。

今月は急に欠席が増えてきましたね。Aさんの様子はどうですか。

- ・保護者との面談
- ・家庭訪問
- ・日常観察の強化
- ・全職員への周知
- ・個別支援の体制

Bさんは、登校しぶりの日があったり、順調に登校したりで、不安定ですね。

- ・教育相談センター等外部機関の紹介
- ・別室確保の提言
- ・個別支援シートの作成
- ・東京学芸大学支援チームによるコンサルテーション

不登校の日数がほぼ毎日になっています。Cさんの保護者と学校の連携はできているようですが、なかなか登校までにはいきませんね。

個別支援シートを活用し、新潟大学支援チームによるコンサルテーション

昨年度70日の欠席があったDさんは、順調に登校していますね。どんな対応をしましたか。

<指導主事の中学校区の情報交換会への参加>
不登校傾向児童生徒の情報交換、対応策の共通理解



改訂の趣旨にマッチした総合的な学習の時間

栗田瑞穂教諭の総合的な学習の時間（以下「総合」）「通学路花いっぱい運動」を参観しました。改訂の趣旨にぴったり合っているこの実践に、これからの「総合」が向かうべきポイントを学びます。

○探究的な活動

改訂で求められた「探究的な学習」を、栗田教諭は「問題意識を持たせる活動 → 課題設定のための個に応じた支援を行う → 協同的に解決させる → 調べたことを伝える場を設定する」という一連の流れで実現しようとしていました。「総合」の解説書p.13の図を見ると、その主張の正しさがわかります。

○協同的に取り組む態度

例えば、グループの「企画書」をまとめ、それを発表する活動では地域の人を招待します。友達だけでなく、地域の人からのアドバイスを得ることで、子どもの活動は「本物」になっていきます。（その際、栗田教諭と地域の方がしっかりと事前の打ち合わせをして、見えざる手がはたらくようにしていたことは見逃せないポイントです！）

○言語活動と結び付ける

言語活動を効果的に絡ませることで体験は子どもに刻みこまれるものになります。話し合う、メモする、企画書を書く、発表会で伝え合う、話し合う、振り返り作文を書く…。栗田教諭は言語活動の充実をはかることで体験の質を高めようとしています。



○子どもの主体性と教師の主体性（適切な指導）

「今までの『花いっぱい運動』では、活動が主となり、問題意識をもたせる場面や追究の過程において子どもの主体性が弱かったという反省点」があったと栗田教諭は考えていました。そこで、子どもの問題意識を丁寧に導き出しました。そこには教師自身の主体性（願いと指導）が十分に機能しています。

○地域や学校の特徴に応じた課題

改訂では「地域の人々の暮らし、伝統と文化」が小学校の内容として加わりました。栗田教諭は地域の人との交流を軸に、地域素材のもつ「総合性」をさまざまに活用しています。

◆ ◆ ◆
「活動あって学びなし」と揶揄された総合を超えるためには、上記のポイント等について再点検し、マンネリを打破することが必要となります。栄小学校のすごさは、この営みが、栗田教諭だけの取組ではなく、校長先生をはじめとして教職員一丸となって行われているところにあります。改訂の趣旨にしっかり対応しようとする意気込みが、日々の教育活動に底流しているのです。

従来の「総合」では、各教科で身に付けた基本的な知識・技能を活用する学習活動を行うことが期待されてきました。今次改訂で、この活用型の学習は、各教科で行われることが求められるようになり、一方、「総合」では、体験的な学習に配慮しつつ、探究的な学習となるよう充実を図ることが期待されています。「総合」の回数「縮減」は、「総合」からぜひ肉が落ちて、より本格的な時間になったことを意味します。実践が求められているのです。教師には、栗田教諭のようにひと皮むけた

和納小学校 地域と共に育てる和奈美の子

和納小学校は「羽ばたく和奈美の子」を合言葉に、地域と共に教育活動を展開しています。「和奈美」の言葉の由来は、古事記に「和奈美の水門」のある地と記され、地域の人々はこの地を「和奈美の里」と、親しみを込めて呼んでいます。

和納小学校では、地域と学校パートナーシップの2年次をむかえ、子どもも保護者も教職員も、地域の方々も、学校を学びの拠点として共に手をつなぎ、共に高めようとする事業を推進しています。

PTA会報「のぞみ」は、44年間の歴史があり、昨年200号を突破しました。これを記念して今年、「記念誌」を発行することになりました。また、「のぞみ」は、県PTA広報コンクールで、3年連続最優秀賞を受賞し、まさに学校と地域を結ぶパートナーとなっています。

教育目標の達成を目指し、「工夫して表現する子」「仲良く協力する子」「進んで運動する子」の3つのプロジェクトごとに7つの具体的な手立てを設定し、教育活動を推進しています。その推進を定着するための教職員研修では、「個人研修計画」に基づく授業研究を重視しています。校内研修テーマにそって、自らが研修計画を立て、授業を中核に研究を深めています。



体力の面では、授業改善や「ふれあいタイム」「ラン RUN運動」の効果がみられ、全国体力・運動能力調査では、全国値に比較して高い数値を示しています。

(文責 西蒲区担当指導主事 野本 豊)

区担当のページ

桃山小学校を訪問して

今年度の重点目標を「かかわり、共に高めあう子どもの育成」とし、日々の実践に取り組んでいます。児童が相互にかかわりあうことにより、考えの交流が生まれ、新しい考えを知ったり、自分の考えを深めたり、新たな考えを持つ機会にするという取組です。

また、今年度の教育課題を「聞く・あいさつ・走りぬく」とし、この3つの力の向上を目指しています。特に、「あいさつ」は重視しており、毎日の成果が確認できるよう造花を使った掲示物等を工夫し啓発に努めています。

訪問時の授業参観で印象深かったことは、教室の学習環境が整備され、授業に当たった教材の準備や説明等にきめ細かな配慮が感じられました。子どもの話すことを最後までよく聴いて、発問等を通してさらに考えを発展させる工夫が見られ、一人一人が大切に育てられている様子が心に残りました。

また、子どもたちが落ち着いて学習に取り組んでいる様子も印象的でした。



(文責 東区担当指導主事 相澤 健蔵)